

## 教育学部新入生オリエンテーション研修

## 運命の出会い

史学科考古学専攻一年

谷川 正 洋

僕は今泣いている。見られると恥ずかしくなる程、情けない顔で泣いている。うれしくてたまらないのだ。

僕は常々偶然というものはないと思っている。全ての出会いに意味があり、その出会いが人を成長させる。僕ら十五人の班員とフェロー、サブ、サブサブの十八人が一班として集められ

た。顔合わせからほんの十日間。見知らぬ者たちが愛すべき人々へと変わっていた。この中の誰か一人でも欠けてしまえば、この素晴らしい夢は見られなかった。この出会いを与えてくれた運命に僕は感謝している。

この出会いが僕に感動の涙を流させた。生誕二十年にして初めての経験である。この感動を、僕らのフェローのおおさんのような素敵なフェローとなつて来年の一年生に伝えたい。文学部のみなさん、一班のスナフキンをこれからもよろしくお願いします。

## 教育学部

## 学科・専修単位で実施

## 新入生の参加率は高い

教育学部学生委員長 長谷川 滋 成

新入生オリエンテーション研修の実施は、その準備において必ずしも順調ではなかった。

昨年の早い時期の全学学生委員会で、従来の全学合同のオリエンテーションキャンプを廃止し、それに伴う平成五年度の新入生に対する行事については、各学部に一任するという、二つの決定がなされた。

本学部はこれを受けて、学部合同ではなく、各学科・専修ごとに、五月下旬までに実施することを確認し、実施にあたっては各学科・専修の意向を尊重することにした。規模を小さくしたのは、入学当初、自分の所属する学科・専修の実情を知ることが、これからの学生生活に利することが大きいと考えたからである。

この方針により、九月以降、各学科・専修は準備にとりかかり、日程として一泊組も日帰り組もあった。本年一月になって、中央との予算折衝のため、すべて一泊にならぬかとの全学学生委員会からの依頼があり、検討の結果、問題を残しながら、それを認めることになった。日帰り組はその時点で、参加者が収容できる宿泊施設を探し、その確保に大奮であった。

かくして、新入生オリエンテーション研修は、予定どおりすべて終了した。新入生の参加者は三十七名、不参加者は九名、参加率は極めて高い。世話をしてくれた二年生が百三十八名、三年生が九十七名、四年生が四十二名、院生が二十八名、それに教官が五十五名である。

研修内容は各学科・専修によって異なるが、主なものは、講話、討議、談話、ゲーム、スポーツ、運動会、オリエンタリング、ウォークラリーなどである。キャンプファイヤー、バーベキューパーティーもある。短い時間を工夫して有効に使い、成果が上がるように努めている。「先輩・仲間・教官との交流・親睦が深められた」、「広大生としての自覚ができた」、「入学当初の不安・緊張がほぐれた」などの学生・教官の声は、成果をいうものである。

参加者数といい、研修内容といい、新入生オリエンテーション研修の目的は達せられた、ということが出来る。

その大きい要因として、規模を小さくしたことがあげられよう。

しかし、課題もあった。日帰り組の宿泊施設の確保、各学科・専修独自の従来からの行事との関連、事前準備、他学科・専修との交流・親睦、在校生の参加・負担、キャンプ用具の運搬、学生個人の経費負担等々である。因みに学生個人の経費負担額は、二千円台から一万円を超えるものまで、その幅は広いが、相応の予算配分が切に望まれる。

これらの課題を含めて、来年度、あるいは来年度以降、本学部として新入生オリエンテーション研修をどうするかについては、検討しなくてはならない。それは前年度の申しあわせ事項である。

